

「山室真澄・神谷宏：『宍道湖におけるヤマトシジミ年間漁獲量と夏季の水温・塩分との関係』陸水学会雑誌（2016）の誤り」の背景にあるもの

2019年9月8日

西村二郎

## 1. まえがき

筆者は先に「山室真澄・神谷宏『宍道湖におけるヤマトシジミ年間漁獲量と夏季の水温・塩分との関係』陸水学会雑誌（2016）の誤り」において、驚くべき誤報が学会誌に掲載され、指摘してもデータ改竄はなかったとして、誤りについては何もアクションがなかった事実。さらに「宍道湖保全再生協議会研究概要報告書（2018年3月）批判」において、山室座長が誤報と同様な思考方法によって、現状の対策としても不十分、将来にも繋がらないようなシジミ漁獲量の回復策を答申している点を批判した。

このレポートでは、このようなことがまかり通る背景について考えてみたい。

## 2. 一般的背景

国が豊かになるにつれ高学歴化が進んだ。平均的にみれば、大学卒の質は低下した。一方、様々な新技術の誕生とともに、学問分野の多様化、複雑化が起きた。当然ながら、化学会や物理学会のような基盤学会の外に様々な学会が派生した。研究者に対するニーズは高まるばかりである。そこで、適性を欠く研究者の活躍場所は質の低い派生学会となる。もちろん、派生学会といっても、質の高い学会もある。逆に伝統ある学会（基盤学会ではない）で、上述の潮流に呑み込まれて泡沫化した学会もあるだろう。

ここでお断りしておくが、筆者は理系の場合、理学だけが学問だとは考えていない。実用のための学問があるのは当然だし大学もあるべきだ。観光学科とか図書館学科などだ。実務教育が主目的の専門学校も大部分は立派に社会貢献を果たしている。それぞれの道を究めた人達には共通するものがあり頭が下がる。芸術家もスポーツ選手も同じだ。

大学の工学部だって実際に役に立つことを目的としているはずである。この考え方に従えば、金融工学、政治工学といった文系の工学も存在する。法学だって大部分は工学だ。ただし、学科によって、学ぶべき自然科学等基礎科学の深さに違いがある。問題は、自分の専門分野を究めるために必要な基礎科学の知識を身に付けていない研究者の存在だ。さすがに、基盤学会では、そのような研究者は弾かれるだろう。しかし、一部の派生学会ではそのような研究者が存在し得るのである。大学進学率の上昇とともに、そのような研究者が増えている。

そのような状況の中で、研究者の評価基準として然るべき学術誌への発表論文数と被引用数がカウントされるようになった。この評価基準が機能するのは、研究者が独創性を追い掛けるという大前提があるからだ。もし、割り切って論文数だけ追い掛ける研究者がいたとしたらどうだろう。質の低い派生学会が受け皿となり、好い加減な論文が査読を通り掲載され、仲間内で引用される。このような生き方をする研究者でも、そこそこに評価されることになる。

行政では、施策を実行するに当り、諮問委員会を設けることが良くある。善意の行為と信じたいが、中には、行政の意思を合理化するための手段として使われる場合がある。また、困難な命題に取り組む場合、一生懸命取り組んでいるというポーズを示すための諮問委員会もある。行政にも、地方と中央がある。もちろん、立派な地方もあるが、一般に地方の方がレベルが低い。地方特有のテーマを探求している場合は別にして、中央で活躍できない大学教授や研究者は一般に地方に流れる。

もう一つの問題に東大ブランドの存在がある。明治維新後、東京帝国大学は高級官僚の養成機関として機能した。最近急速に、官僚＝東大卒という図式が崩れてきた。しかし、まだ残っている。とくに地方においては。

研究費を取る場合も東大ブランドは役に立つ。研究費を取ってくる教授は研究能力以上に有難がられる。

大学教授の身分制度についても一言。教授になるには、論文数だけでなく実質的な業績が必要だろう。しかし、なってしまうえば、余程のことがない限り、自動更新の世界である。長い人生だから、研究能力に拘る問題に遭遇することもあるだろう。交通事故で頭を打ちその後遺症があるとか、極端な場合は、若年性認知症に罹ることもあり得る。このような可能性を挙げなければならない程、山室・神谷報文の誤りは初等的だった。

諮問委員会の座長にはプログラムマネージャーとしての素養とセンスが求められる。しかし、専門分野を深掘りして一家をなすタイプの教授もいる。というより、そのような研究者の存在こそ貴重である。そのような研究者や専門家の卓見を集めて与えられたテーマの解決策に導くのが座長の役目である。

座長はゼネラリストである。しかし、専門分野で業績を挙げられなかった教授がゼネラリストと誤解されて座長を務める場合がある。東大を初めとするブランド大学の教授に多い。このタイプの座長はいろいろな分野の知見に接する努力をする。しかし、系統的ではない。そして中途半端な理解に基づいてまとめようとする。

さらに問題なのは、「何が何でも解決する」という本来、プロマネが持つべき目的意識が希薄なことだ。実績が伴わない場合、民間ならすぐに更迭される。

### 3. あとがき

山室・神谷論文の誤りに遭遇し、その背景を考えているうちに、憂慮すべき問題点が浮き彫りになってきた。このまま、創造性を追究しない研究者が増えてくれば日本の将来は暗い。研究費を出す国側の責任も重大である。国として重要視すべき研究の方向性を決めるのは官僚である。センスのない官僚の研究行政の失敗は多い。しかし、反省の弁は聴かれない。中止になったとはいえ、中海と宍道湖の下流域の埋め立て問題もその一つである。国の委託研究は全て「成功裏に」終わったと総括されるのが常である。

以上